

経験のエレメント——体の感覚と物象の知覚・質と空間規定——

## はしがきに代えて

### (一) 宿題

私はこのところ、人間は物的環境世界を生きるだけでなく「意味世界を生きる」動物であるということに焦点を定めて、あれこれ書いてきている。言葉を巡るさまざまな著作、論稿の場合に「意味」について考えるのは当たり前だが、食べることを主題にするときも、環境問題を論ずるときも、社会の成り立ちや秩序の形成、変容を扱うときも、意味はいつでも焦点の一つであった。「価値・意味・秩序」の三つ組みでさまざまな事柄を理解してゆくというのは、私の基本態度となっている。

「意味世界とは価値世界」であり、人は動物としてたとえば気象や食べ物などの物的価値事象と関わる一方で、更に意味の力と一体になった価値の感受によって自分の生活を方向づける。食べ物さえ、さまざまな意味（たとえば祝いという意味、もてなしという意味）のもとで栄養物としての価値とは違った価値づけを纏まとったものとして関わる相手となる。（一般に物的世界のすべてが人間ではさまざまな意味に覆われ、その意味に応じた価値づけのもとで相手にすべきものとなる。）

意味と価値との世界を論じることには、人個人の日々の生活、人間関係の有りよう、社会の成り立ち、さまざまな文化、夢やフィクションの力など、どこまでも広がる多くの考察課題を追っかける楽しさがある。そうして、そのような考察においては、哲学は生き生きとした現実と向き合い、そこから糧かてを得て柔軟で強靱なものになるし、かつ、人の心を揺さぶる文学や、事柄の理解を促し事柄の評価の参考になる批評などのように、現実生活に入り込んでその養分となる仕方で実際の力をもつことができると信じている。

しかしながら意味世界は、人が物的環境世界に生きるという根本があつて、その上に広がるものである。だから、この

根本がどのような有り方をしているか、きちんと押さえておく必要があるのではないか。——いや、この有り方がどのようなものかは、人間を動物として捉えたときに既に言われているのであって、生物学、動物学に連なる諸学問が多面的に研究し明らかにしてきているのではないか。このように考える人は多いだろう。だったら、私に何か言うことがあるだろうか。二つの事柄を考えたい。

一つは、動物一般ではなく人間という動物を話題にしているということである。人が意味世界をも生きようになるには、それを許すような物的世界との関わり方が基礎としてあるはずだろう。そして、意味世界を生きるというのが人間という動物に特有のものであるなら、その基礎となり得るということを念頭においた仕方、しかしながら物的事柄への意味の関与が加わる前の姿にできるだけ近づく仕方、物的世界を人はどのように経験するのかを浮き彫りにする、という作業があるのではないか。（私たちの現実では、物的世界との関わりには意味の関与がみられないことがない。言葉を知っている上で向き合うだけでも、物的世界は意味を纏ってしまふ。だから、意味関与以前の経験の有りようをそのものとして確認できない。そこで、「できるだけ近づく」という言い方をしている。）この作業は、物的世界がどのようなものであるかと、それを経験する側である人とはどのようなものであるかと、両方について、目配りするのである。

このアプローチは、人間は他の動物とどう違うのかという極めて自然な問題設定の数ある中の一つでしかないが、もう一つの関心（前々段落末で考えたい「二つの事柄」と述べたことの一つ）と結びつくことで、進化論や比較動物行動学などとは違った色合いのものになる。進化論等は、当然に人間の体がどのようなものであるかに大きな関心をもつ。ヒトの体はミミズの体とも小鳥の体とも違う。脳などの中枢をも含めた体の違いが、或る動物種と他の動物種との違いを説明し、また、環境というものとの関係をも説明する、そういう発想を現代の私たちは躊躇わずに採れている。私はこういう発想の確かさを大いに認めていることを断った上で、自分に何ができるか、何を考察すべきか弁えた上で、本書を構想している。

生物学、動物学に連なる諸学問からの解明なら、私はただ研究者たちから学ぶだけである。何を言おうと、教えてもらったことを受け売りで言うという、しょうがないことしか残らない。だとしたら、私は何をやりたいのか。それは、私が制

度化された学問領域としての哲学に長く携わってきた立場からのものである。

生物学は古くから豊かな内容をもった学問として成立していた。しかし、たかだか四〇〇年前に西洋で誕生した近代科学のその後の凄まじい発展と無縁であるはずがない。近代科学は天上の天文学と地上の力学との結合によって誕生し、物理学において確立し、続いて電磁気学、化学等へと領域を広げたのだが、生命というものの扱いは苦手であった。それゆえにか、新しい生物学は他の自然科学諸部門からはかなり遅れて、しかも多面的な仕方で成立してきた。ただ、生物学が学として守るべき方法のいわばガイドラインに関しては、近代科学が確立したものを必ずや踏襲している。（これについてはここで論じない。「多面的な仕方」というものがどういうものであったかについても紹介を割愛する。本書を逸脱することになるからである。）

ところで、西洋における近代科学の誕生は、西洋近代哲学の胎動と軌を一にしている。このことの核心は、西洋近代哲学が物的世界をどのようなものとして捉えたのか、という物質観と、その物質観に伴う、物質に関わる事柄をどう認識するか、の方法論にある。（このことについては本書の第3章第3節で少し述べている。）しかるに、近代哲学の物質観は、その人間観と切り離せない。そして、物質観も人間観も（とりわけ人間観の方は——というのも、物質観の方は哲学を離れて歩み始めた近代科学もまた育ててゆくのであったのだから——）近代哲学の認識論的努力の中で生まれたのであった。

物的世界を人間はどう生きるのか、という問題設定よりは、確実な知識を求めたいという強烈な欲求のもと、そもそも物的存在はあるのか、あるとすれば、どのようなものか、どのようにして認識できるのか、また、そもそも人間とはどのような存在なのか、どういう存在だから、人間による物的存在の認識を巡ってはどのような事情があるのか、このような事柄が問題にされたのである。

そこで、私は自分の立場から、このような西洋近代哲学が主張する内容を念頭に、同じような主題を巡っての自分の考えを表明しなければならないと考えてきた。また、私の主要関心事である意味世界、人が生きるに当たって途轍もなく重要である意味世界の基礎には物的世界があるのは当然だから、そういう理由でも、この主題についてきちんと論じること

は私の課題であった。

この課題の一部に私は、古くは『知覚する私・理解する私』（勁草書房、一九九三年）という著作で取り組んだ。しかしその後、この主題に属するあれこれの考察を、幾つかの著書や論文の中に挿入してきた。ただ、それらの著書、論文それぞれの中、心主題を論ずる際に、関連して言及しないわけにはゆかない事柄だけを論じるという仕方であり、従って分散して書いてきたのである。そこで、改めて体系的にまとめて論じ直す必要を思っていた。しかるに、その作業は二つに分けることが望ましいと考え、二つの著作を構想し、それらが私の宿題としてあり続けてきた。

その一つが、先に述べた「物的世界を人はどのように経験するかを浮き彫りにする」ことを目指すもので、本書である。（もう一つは『方法という問題群』である。これは、西洋哲学以降の主要関心の一つである認識の問題を取り上げれば、おのずとさまざまな「方法」を考察すべきとなるのだが、単に認識の方法ということに留まらず、人が生活することにも当然にみられるさまざまな方法を取り上げ、検討を加えることを課題にしている。生活の中で人は実にさまざまな事柄に出会すが、それらに対処するさまざまな仕方がある。そこで、それらを掘り起こし、それらの間にみられる諸関係を明らかにしたい。このように極度に広げた意味での方法に関する考察を試みるのは『方法という問題群』である。こちらは執筆を始めたのは一〇年も前かと思われるが、随分と前に中断している。だから、未だ宿題である。）

本書の中心をなす部分については早くに、ほぼ書き終えた。しかし一方で、特に「情報」の概念を扱う部分では、その性格上、本書の性格を越えて膨大に膨れあがっては削除し、また、本書をなぜ著すのかについて述べる序論や、本書の考察の哲学史との繋がりを示そうという意図をもった別種の序論などを何度も書き、特に後者も途轍もなく長くなり結局は没にし、暫く放っておくという具合で、他方では、締め切りのある論文や著作の執筆で中断し、ということを繰り返してきて、本書を仕上げることは長い間、私にとって宿題だったのである。

## （２）経験とそのエレメント

本書の主題を、「物的事柄への意味の関与が加わる前の姿にできるだけ近づく仕方、物的世界を人はどのように経験するのかを浮き彫りにする」と述べた。ここで私が「経験」と呼ぶものは、人が各自自分の生の主人公として生きることの総体である。しかるにその総体には意味世界を生きることがある。すると、その前段階で基礎となるものをエレメントと呼ぶなら、本書は「経験のエレメント」に目を向ける、ということになる。ここで、このエレメントと、私が考える「人間がなす経験というものに含まれる他の重要な要素」との関係について、大雑把な見取り図を述べておこう。

エレメントとして三つを挙げることができる。「体の感覚（空腹感などの「欲求を含む」）と「体の運動」、および「物象の知覚（物象の運動の知覚を含む）」。そして、これらの有りようを詳しく調べるのが本書の主題となる。これらは、人が、生きていく体として存在し、その体は物的環境と関わることなしでは存在し得ず、その関わりには体の側の積極的運動が不可欠のものとして含まれるという、三つの局面を言い表している。ただ、生きるのは人なのであり、それもそれぞれの、いつか「私」と自分のことを言うようになる人なのであるからには、これらの要素が特定のその人の事柄なのだ、ということが顕わになるような場面を視野に入れて取り出すのでなければならぬ。具体的に分かりやすい言葉を援用すると、「意識」に上る<sup>のぼ</sup>、体の感覚、体の外の諸物象の知覚、それから己の運動ということになる。ただ、意識を言い出すと話が込み入ってくるので、この辺りのことは本文での考察を読んでいただくしかない。

そして次に、二つの重要な要素が登場する。その一つは、まさに他<sup>ほか</sup>ならぬ一人一人の人が自分の生を生きるということの中核を成すものとしての「感情」。感情経験なくしては人間の経験は深みをもたないのだから、感情をも経験のエレメントの一つだと考えたいくらいだ。ただ、恐怖とかの原初的なものから、人間関係を通じて生まれるもの、意味を経由して生まれる複雑なものまであり、特に意味事象との関わりにおける感情の発生のことを考慮すれば、やはり基層のものと認めるわけにはゆかない。

もう一つは、「想像」の働きである。そうして、想像こそは他の動物にない人間に特有の能力ではないかと思われる。想像の萌芽は知覚の中にある。一般の物象の知覚の場合には、次のような傾向が同じような知覚ないし知覚系列の反復を

通じて生まれることを考えればよい。(反復という契機に目を向けると、想像については記憶という問題系も一緒に考えねばならないことが分かる。)動いているものが何処に向かうのか分かる。見えなくなつたものを再び現われるかと待ちかまえ、更には、隠れてしまったものとして探す。予期は想像の前駆形態であらうし、見えないものを在ると思うとなると、想像へはあと一步ではないか。そうして、ゴトンゴトンという遠くからの音を聞きながら、鉄橋を渡る列車を想い浮かべ、濡れた地面を見て夜に降つた雨を想い、その地面がきらきら光っているのを見て今日は暑い日になりそうだと思う。このような単純なことが既に立派な想像ではないか。

そして、もう一つ、人の顔(続いて姿)の知覚が二つの方向への想像を誘う。一つは心というか内面。決して知覚内容にはならないが分かるもの。人の喜びや、がっかりした瞬間が分かる、これが更に能動的な想像へと伸びてゆく。また、声を聞くだけでも、その声を出す人の心の弾みや意欲、苛立ち、驚きなどが想像できる。他方、人が何をしようとしているか分かる。未だ実現されていないことが人の現在の動きを見て分かる。これまた想像する力へと発展する。そうしてもちろん、自分の運動経験が人間の行動になるに当たって、想像は重要な働きをする。「どうしよう?」というしよつちゅう湧いてくる問いに答えて行動するとき、あれこれの行動(もしくは何もしないこと)が何をもちたか想像して選ぶ。

とは言え、このように記してはみたが、恐らく、人との働きかけ合いから始まる「言葉の使用」こそが想像を現実化するとか、明瞭な形を与えるというかするのであり、想像の働きを爆発的に拡大するのだと思われる。言葉に託して想像は浮遊するだけのものではなくなる。言葉は音によつて意味事象へと向かうのであり、想像もまたまさに意味世界を形成し、かつ、感受することではないのか。(そしてこの感受が想像を各目の事柄とするし、感情に養分を与える。)そうして、体の感覚と物象の知覚という「現われ」が意識の最初の登場であらうが、意識は想像というエンジンによつて羽搏き、どこまでも広がってゆく。体の感覚と物象の知覚という圧倒的に稠密で現実性の強度が高い現われ、これとは違う別の現われの形式を言うことができるようになる。こうして、この「はしがきに代えて」冒頭で話題にした、「意味が価値をもつ世界」へと人は入ってゆく。また人は、自己像というものを一つの意味事象として形成してゆく。



さて、先に述べたように、感情は「人が自分の生を生きる」ということの中核を成すものののだが、その感情と体の感覚とは、ともに人の現在を満たし、最強度の現実性をもった存在を人に与える。しかるに、想像によって入り込む意味世界は人をそのつどの時間への閉じ込めから解放する。そこで、現在という時間がある存在そのことから切り離せないとするなら、それとの対比で、時間を越えた意味世界に赴くとは、さまざまな可能的なものに関わることだという言い方をしてもよい。

しかるに、人がさまざまな可能的なものを一緒に見渡し、それらの関係を思い浮かべようとするとき、想像は「思考」に変貌する。(或る事柄が他との関係において可能、必然、不可能の様相のもとで想像されるとき、想像は気儘なものではなくなり、秩序だったもの、つまり思考となる。そうして思考は、時間の推移とともにある現実を偶然という様相のもとで意味世界に取り込む。序でながら、或る哲学者たちが語る「知的観念」を「直観」する仕方では把握するたぐいの「純粹知性——感覚や想像の働きによる汚染を免れた知性——」などという概念は一つの虚構に過ぎないと言わざるを得ない。想像の或る仕方での働きとしてしか思考はない。)このような思考の位置づけをここで述べるのは、認識論に大きな比重をおく哲学が思考とか知性、理性等を持ち出す傾向への対抗として、一言したいからである。(たとえば「理性」というものにしても、「能動理性」「純粹理性」「啓蒙的理性」「弁証法的理性」……というふうに幾種もの理性が、哲学の流派によつて違つた仕方では持ち込まれたりするような状況で、哲学は、ときに「厳密な学」を追究すると称しながら、一体何をやっているのだろうか。哲学者たちに共通の術語がない。この状況をどう解釈するかは、哲学とはそもそもどのような営みかを——いわゆる「学問」なのかを含めて——考える上で興味深い事柄だと考える。)

なお、「思考」と言うと、科学的認識とかのことを典型として思い浮かべる人が多いかも知れない。だが、むしろ私たちの生活では、「どうしよう?」と問うて答えを探すために考える、ということに大きな部分があるのではないか。人は、どういう行動をどのように為すかに関して、あるいは止めるかに関して、あれこれの行動が何をもちたらず、ないし引き起こすかを想像し、また、行動の道筋を行動することに先立って首尾よく描こうと、行動に関わるさまざまな想像内容が相互にもつであらう諸関係を探るのである。そうして、行動を巡る思考ないし想像でも、人は、自分が他の人々と一緒に暮



らす世界で行動するのだということ、人々とはそれぞれに感情をもち、人の行動も含め、いろいろなものをさまざまな仕方で見え、評価するものであることを念頭におくものである。

さて、以上の見取り図のもと、本書は人の経験の基盤を成すもの、すなわち体の感覚と運動経験、および物象の知覚がどのようなものであるかを、明瞭にみてとることを課題とする。恐らく人間という動物だけがもつ想像については、別の著作で十分に論じたいし、また、人の感情生活という主題は、論文的な哲学書とは違った形で記す試みのために残しておきたい。それに何より、体の感覚と物象の知覚とを論じるだけで長大なものになってしまうのである。

### (3) 現代の文化状況——感覚の時代・断片的感覚化される情報——

それから、最後に一言。一般に「感覚」という言葉で、体の感覚である痛さや疲れも、物象の知覚の一要素としての色や匂いや音も、まとめて指すのが普通である。日常生活のレベルでのこの使い方を批判しようなどとは私は全く思わない。このことを断った上で、しかし本書では、表題からも分かるように「感覚」という言葉を「体の感覚」に限定して用いるべく、考察を進めてゆくことになる。そこで、色、匂い、音などは、体をも含めた物象一般の「知覚」の要素(すなわち知覚的質)として考えてゆく。このことの理由は本文で述べてゆく。けれども、当座は普通に「感覚」という言葉を緩く使うことにして言うのだが、現代の文化状況には「感覚の時代」と呼びたい要素がある。それも、さまざまな「情報処理の器機」を通じて手に入れる感覚が非常に多い。この点に目を向け、本書の話題がどのように関係しているか、言っておきたい。

念頭においているのは、テレビやネットにつながったパソコン等の画面に現われるさまざまな映像を見、音響装置から流れ出る音を聞く、それから更には、ゲームを提供してくれる器機の画面に向かって腕を動かすと何かに触れたかの感じをもち、少なくとも画面に映っている何かを自分が動かしたと思える、そのような経験である。更には映画館で映画の場面によつては椅子が振動する仕掛けがある。果ては、或る匂いすら漂わせるような装置の開発も行われているようである。「物象の知覚」と言うとき、自然の事象の知覚が基本であり、それらは状況によつて、見られ、聞かれ、触れられるも

のである。ところが、たとえば映像は見ることにしかできない。その映像の見え(見ることによって得られる内容)とは違った内容の感覚が付け加わることもあるにしても、その別種の感覚を供給するのは映像そのものではない。別のチャンネルでの情報処理プロセスが作動する結果である。(自然の物的事象の場合にももちろん、見ることに、聞くことに、触れることなどそれぞれの持分はある。けれども、それらの統合は物的事象の側が促すのである。それに対して、いま指摘した状況では、そうではない。)

映像や音に絞って考えるに、器械によってもたらされる映像や音の由来には二つが区別できる。一つは、器械を「情報処理の器械」と性格づけたことから分かるように、或る現場に居合わせれば見たり聞いたりできるものがどのようなのかを、そこに居合わせない人々にも二次的に経験してもらおうと、「見え」や「聞こえ」の内容を届けると、それが映像や音になるのである。(そのプロセスがなぜ「情報の処理」だと理解されているのかの議論は省く。情報の取得や処理等に関する部分的考察は本書の第2章第3節を参照。また、情報を言えば、言葉について論じるべきということの他に、真偽の別という論点、何を強調するか、歪曲がないか等の話題も出てきて、これは現代の文化状況における重要な問題としては詳しく論じるに値する事柄であるし、また、哲学でお馴染みの認識論的課題とつながるといふ側面もあるのだが、本書の主題からは離れる。)

映像や音のもう一つの由来は、人による製作である。コンピュータグラフィックや電子音等を思い浮かべればよい。現実にある素材(器械を通さずに直接に見聞きできるもの)から採集した映像や音も、その加工仕方によっては製作物と変わらないものになる。そうして、これら製作においても、前段落で述べた情報処理の際に用いられるのと同じような技術が駆使されるし、人々が映像や音に接するのも同じような器械による再生を通じてである、ということだけを注意したい。

以上を確認した上で考えたいのは、私たちの間で、器械から流れ出る音や映し出される映像を単純に楽しむという態度が普及していることである。このような態度の取り方は、元々は或る事柄についての情報の収集、伝達を意図して採集された映像や音に対してもみられる。映像や音がどういう由来をもつかはどうでもよく、その映像の現実、音の現実だけに心を奪われるのである。そうして、その先には更に、器械を駆使してバーチャルな世界を楽しむという、今日の人々の一つの経験の有り方もある。先に、画面の中にあるものを、見ている人が自分の体の運動によって動かすかのごとく感じ

るとかの例を挙げたが、これもその一例であろう。（画面に映る或る「映像」を、画面の「中にある——在る——もの」と表現したことにとも注意していただきたい。）

「感覚の時代」は、遊園施設、アトラクション、ドラッグ等を通じて強烈な感覚や普段は得難い感覚を味わってみたいという欲求を人々が呼び起こされるようになった頃から始まったと言えるのかも知れない。しかし、今日の、氾濫する器械を通じて提供される感覚、バーチャル体験には、かつてささやかに流行した疑似体験とは異質な部分がある。ばらばらの感覚、断片としての感覚が幅を利かせるのである。すると、単に感覚を楽しむなどと言っておられない状況も生まれかねない。この懸念は、各人の「自己」とはそもそもどのようなにして己を獲得するのかに関わる。自己は人の生きることの主人公となるべきものであるが、その自己の輪郭が不明瞭になってゆくことではないのか、という危惧である。バーチャルとは現実ではない、という響きをもつが、他方でバーチャルなりの現実性をもっている。痛さなどの体の感覚は自身の有りようを告げ、色や音などをその色をしたもの、音を出すもの、つまりは体の外の物象がどのようなものかを告げる役割をもつはずなのに、そうして、体や物象は確固たる存在性をもつものとして手強くて確かで持続する現実を成すのに、その任務から離れた感覚にばかり浸るとどうなるのか。手強くて確かで持続する現実、また、こちらの探索に思っている側面を見せもする現実**に強くコミットする仕方**で形成されるはずの自己というものの有りようを考えなければならぬ。もちろん、冒頭で述べたように人は意味世界にも生きるのであり、実は「自己像」というものは一つの意味対象として各自が形成するものである。しかし、その意味世界は、ここで言う現実**に養われ、かつ現実**にさまざまな彩りを与え、そこで意味世界に生きることには人を豊かにするものなのである。しかし、バーチャルの経験には、少し違った風景がみえる。

さて、今日の文化的状況における、いわゆる情報器械の盛んな活用に着目した話をしたが、現代、人の環境はさまざまな種類のものに分岐し、それぞれで性格に違いはありつつも、いずれも人工的であるという面だけは急激に進んでいる。その結果、一方で人々の経験は多様なものになり複雑化し、そのくせ他方で或る意味で痩せ細っている。というのも、人

がつくつてゆくものはどんどん増殖するが、それらには深さや厚みが欠けている場合が多いからである。人工的なものというのは、人が事柄を己のコントロール下におこうとして生み出すものだからである。（それでいて、たとえば大規模な工場で、始動ボタン一つで機械が動き始めるのに、そのシステム全体のどこで何が進行しているかを、ボタンを押す人が把握しているとは限らないし、また、或る動きが起きたとき、それを修正するのにどのようにすれば分からないというようなことも生じる。人工物は、予測を越えた状況では<sup>しばしば</sup>屢々コントロールできないものになる。）

筆者は、人は自然の存在というものに鍛えられることが必要だと思う。この思いは、人間の経験に強さと豊かさを与える構造とはどのようなものはずだろうか、という問いを背景にしている。人の経験の基盤は本来どこにあり、その基盤の上でどのような経験様式が可能となっているのか、確かめる必要があると思う。ここにも本書執筆の動機がある。

なお、体の感覚と物象の知覚について本書が述べることは、実のところ私たちの常識的な考えと余り変わらない。それも当然といえは当然で、常識というものは、領域によつて違うが、けっこう健全なものだからである。そこで、当たり前前のことがくどくど書かれている、という印象を与えるかも知れない。しかし、その叙述には、最初に述べた私の立場が絡んでいることを理解していただければ幸いである。すなわち私は、同じ主題についてこれまでにさまざまに提出されてきた哲学の考えやアプローチ仕方というものを念頭に（ほとんど表には出していないが）、対案を提出するという意図のもとでの考察をしていて、しかるに、哲学の学説というものには、むしろ常識を浅薄だと決めつけて難ずるというふうな傾向があるゆえ、その種の哲学を批判する筆者の論述には、結果として、指摘したような印象が生まれる可能性もあるだろう、ということなのである。ただ、常識の擁護という側面がある場合にも、どういう意味では擁護できるのか、ということをも明確に示した上でのことになっている。



# 大目次

経験のエレメント——体の感覚と物象の知覚・質と空間規定——

|                                         |     |
|-----------------------------------------|-----|
| はしがきに代えて……………                           | i   |
| 第1章 色の特定……………                           | 3   |
| 第2章 視覚の生理学と脳科学……………                     | 41  |
| 第3章 西洋近代哲学および近代生理学確立期の生命論における意識の概念…………… | 163 |
| 第4章 感覚と体の広がり……………                       | 207 |
| 第5章 知覚の空間性……………                         | 273 |
| 第6章 体という尺度と体の知覚……………                    | 417 |
| あとがき……………                               | 459 |

# 詳細目次

経験のエレメント——体の感覚と物象の知覚・質と空間規定——

はしがきに代えて ..... i

## 第1章 色の特定

第1節 色の帰属 ..... 3

(1) 「色はものの性質でも光の性質でもなく心の産物である」という考え ..... 3

(2) 色が見えるために必要なもの ..... 9

(3) 物と色——物への通路としての色・色を見たり作り出したりする最も簡単な方法—— ..... 11

(4) 物とその性質——関係的なものであるゆえに潜在的な場合も多い—— ..... 15

(5) 光と色 ..... 19

(6) 知覚対象と知覚的質——行動の原理に従う分節—— ..... 21

(7) 音と音の出所——関係的なものである性質の帰属先は行動の原理に従う—— ..... 24

第2節 色は見る人において生じるという考え ..... 25

(1) 見る人によって見える色は違うという考え ..... 25

(2) 特定の色にこだわるとき ..... 27

(3) 見る人の違いに注意を払うとき ..... 29

第3節 「花子の赤」「太郎の赤」「薔薇の赤」 ..... 31



## 第2章

### 視覚の生理学と脳科学

#### 第1節

- (1) 色を特定する仕方 31
- (2) 「花子の赤」と「太郎の赤」とを比べるとは? 34
- (3) 見る色と想像する色——ものの色・心の中の色—— 37

生理学における「色は感覚である」という考え……………41

(1) 生理学における〈感覚〉の概念——刺激の受容によって生じるもの—— 41

(2) 色の生理学——適刺激としての光に対応する色の〈感覚〉—— 50

(3) 光の消去——特殊神経エネルギーの法則・感覚神経系が前面に出る—— 52

(4) 色をもたない物に色を見る——終点から出発点への「投射」という概念—— 54

#### 第2節

視覚の生理学と脳科学とによる空間規定の扱いおよび情報概念の駆使……………60

(1) 生理学によって前提されている三次元の物理的世界と視覚 60

(2) 空間的な分解能——横の空間規定・弁別であって産出ではない—— 62

(3) 或る脳科学者の解説——脳による奥行きの復元—— 64

(4) 前提されていること 68

(5) 分かりやすさの消失 74

#### 第3節

視覚の生理学と脳科学における情報概念の多用・濫用……………76

(1) 生理学と脳科学における情報概念の使用 76

(2) 変化の組ないし系列に情報を読み取ることと情報処理の系列と 83

(3) 情報処理の概念を生理のプロセスに適用するに当たつての問題点 90

|                                         |     |
|-----------------------------------------|-----|
| (4) 情報の読み取り手と何を読み取るのか——被験者と研究者——        | 95  |
| (5) 被験者の脳を被験者と等値してしまう                   | 100 |
| (6) 脳と体と末梢                              | 102 |
| (7) 二つの考えるべきこと                          | 104 |
| (8) 「見るという情報形式」?                        | 105 |
| (9) さまざまな情報形式の系列の中に視覚という情報形式を入れてよい気になる  | 109 |
| (10) 感光フィルム(銀塩写真)カメラにおける情報形式            | 115 |
| (11) デジタルカメラ等における情報処理と生理的過程の類似?         | 120 |
| (12) 情報を得ること・情報を取り出すこと                  | 123 |
| (13) 像という情報形式                           | 126 |
| (14) 知覚による情報取得・情報の読み取り・情報内容の再現          | 129 |
| (15) 二つの再現                              | 140 |
| 第4節 「復元したものを感ずる」……………                   | 144 |
| (1) 「再現」と「復元」                           | 144 |
| * 「脳の中の小人」                              | 147 |
| (2) 「三次元構造であるように感じる」?                   | 150 |
| (3) 「主観」と「意識」の概念・いわゆるクオリア               | 153 |
| 第1節 「思う私」と「観念」の概念……………                  | 163 |
| 第3章 西洋近代哲学および近代生理学確立期の生命論における意識の概念…………… | 163 |

## 第4章

### 感覚と体の広がり

#### 第1節 感覚の概念

(1) 奥行き起点としての体——痛さと体と心——

207

207

207

#### 第2節

##### 意識の概念と「思い」思惟

..... 178

(1) 観念の現われの場としての「意識」の概念 178

(2) 「思う」という概念の拡張——知的働きとしての「思う」ことから「感覚」や情念を含む「思う」ことへ—— 180

(3) 「意識」の概念の「思惟」の概念への従属 183

(4) 「意識と存在」という問題設定 187

#### 第3節

##### 生命と意識

..... 189

(1) 本節の概要 189

(2) 体を含めた物体——内在的原理を剥奪された物質界—— 191

(3) 分割線の移動——生命体と外界—— 195

(4) 有機的生命と動物的生命 198

(5) 「感覚性」という概念の変質 201

(6) 脳科学における「意識」の概念 203

|                                                  |     |
|--------------------------------------------------|-----|
| (2) 「感覚」という語                                     | 209 |
| (3) 痛さの感覚といわゆる五感——「感覚」という語の限定的使い方に向けて・知覚的質との区別—— | 212 |
| (4) 色と痛さの比較・補足                                   | 217 |
| 第2節 感覚と体の広がり                                     | 222 |
| (1) 感覚と体と「私」——存在概念の故郷——                          | 222 |
| (2) 指の痛さと指の色                                     | 226 |
| (3) 体の目覚めとしての意識と「私」                              | 227 |
| (4) 感覚——体という存在の訴えとしての意識形態・幻影肢の問題——               | 231 |
| (5) 感覚と体の広がり                                     | 233 |
| 第3節 感覚を含む価値的契機と行動の動機づけ                           | 236 |
| (1) 体の現在の状態の自己告知としての感覚                           | 236 |
| (2) 感覚と行動の要請                                     | 237 |
| (3) 体の要求——生理と行動・眠りと感覚および知覚——                     | 239 |
| (4) 知覚と感覚の協働や競合                                  | 241 |
| 第4節 体と体の外——体の近傍の空虚と地盤——                          | 244 |
| (1) 私のミニマムな経験を求めて                                | 244 |
| (2) 体の重さの経験                                      | 247 |
| (3) 温冷・寒暑の経験                                     | 250 |
| (4) 「此処」と体を含む方向性                                 | 252 |
| 第5節 体の動き                                         | 255 |

## 第5章 知覚の空間性

### 第1節 体の移動と空間

(1) 世界の空間性

273

(2) 体を移動させる——實在概念の根っ子——

276

### 第2節 体と価値づけられた体の外の諸事象および刺激の概念

(1) 体の外を満たし分節を持ち込むもの

278

(2) 見ることと目の感覚

280

(3) 体と体の外の諸事象

283

(4) 「刺激・感覚」「刺激の源への(感覚)の投射」「刺激・運動(ないし反応)」

287

(5) 意味ある作用としての刺激——弁別と現われ——

292

(6) 目覚め——知覚世界への帰還・価値事象と行動——

296

### 第6節 触れられ感覚と異物

(1) 動かされる——運ばれる・押される——

267

(2) 触れられる——触れられ感覚の特殊性——

270

(1) 体を動かすことによる感覚の出現

255

(2) 体を動かすことができる——局部を動かすことで——

257

(3) 動かされるから動くもの

260

(4) 自ら動く——体と体の外の事柄との意識・課題の感受というステージ——

262

(5) 体を動かすことにおける体の空間性と感覚の座としての体の空間性との統合

266

触れられ感覚と異物

267

## 第3節

刺激から始まる生理的プロセスと「刺激・感覚・行動」および「刺激・知覚・行動」

302

(1) 刺激を受けての「生理的プロセスだけによる対処」と「感覚と行動による対処」との対比 302

(2) 感覚による知覚の妨害 310

(3) 感覚と知覚との共通の根つこと両者の分化・競合 313

(4) 知覚と行動との切れ目 315

(5) 「刺激・体の局部の反応」と「刺激・個体(体全体)としての運動」 319

(6) 壁と炎——ゾウリムシの無定位運動性と人間の行動—— 322

(7) 一時的な終点としての知覚、行動が始まるまでの「間」——「現われ」という「私」の内容と現在—— 327

(8) 奥行きと行動・複数の知覚対象と横の広がり 331

## 第4節

探索的契機を含む知覚と知覚空間…………… 335

(1) 伸縮する知覚空間——方向と遠さ・知覚器官の探索運動—— 335

(2) 横の広がりとは知覚空間の構造化——場所としての理解—— 342

(3) 聴覚空間 346

(4) 触覚による対象の位置づけと運動空間 347

## 第5節

構造化された知覚空間と場所の理解と存在…………… 348

(1) 異種の知覚内容の位置規定による統合——知覚的質の物や事象への帰属—— 348

(2) 異種の知覚によって共通の存在へ 353

(3) 異種の知覚内容の統合の失敗——位置の不一致—— 356

(4) 見かけの位置と本当の位置——体と場所を争う—— 359

(5) 知覚の現実性と行動の現実性 362

## 第6節

色の外在性と奥行き——視力を取り戻した人の例による再確認——

364

(1) 視力を取り戻した人の話——見える内容という情報を解読しなければならない——

364

(2) 色という手掛かり

379

(3) 空間規定の統合・動くもの

387

(4) 成熟した知覚——色(知覚的質)と物象(知覚対象・安定した空間規定)——

392

(5) 現われる仕方で存在するものを捉えること——現われを越えるものと想像の契機?——

397

(6) 奥行きを見ることが——写真や図に奥行きを見てとることとの違いを通じて——

399

(7) 写真がもつ情報——像——

408

(8) 写真がもつ情報——色——

412

## 第6章 体という尺度と体の知覚

## 第1節

体の空間性と体の知覚

.....

417

(1) 尺度としての体

417

(2) 体の運動と空虚・運動を阻むもの

420

(3) 体の輪郭——一般的な体の像としての視覚像——

422

(4) 自分の体を知覚するとは

425

(5) 自分の体の知覚の特殊性——視覚のパースペクティブ性との関係で——

427

## 第2節

行動対象を見る・自分の体をも見るか

.....

431

(1) 苺を摘む——苺を見、副次的に手を見ることもある——

431

(2) 行動の担い手であることとパースペクティブの中心であるということ

435

第3節 感覚の座を知覚する ..... 437

(1) 感覚に関する因果理解

437

(2) 痒いところを搔く

440

\* 皮膚を見る・葉を塗る・葉を飲む

442

(3) 物と体との共存

443

第4節 体と類型的なものの配置が強調される知覚世界 ..... 445

(1) 体の知覚における異種の知覚の調和

445

(2) 何が知覚されるか、および異種の知覚内容の統合についての再考

448

第5節 他の人の体を知覚する・人に知覚される経験——想像の促しと意味世界への参入—— 450

(1) 体の状態・動き・顔を見る——現在に焦点——

450

(2) 視線を見る

452

(3) 視線を逸らす・衣服

453

(4) 声を聞く・言葉への移行

455

あとがき ..... 459





## 著者紹介

松永 澄夫（まつなが すみお） 立正大学教授、東京大学名誉教授

1947年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科中退。

人が関わるあらゆる事柄の基本的筋道について、言葉による地図を作成することを目指す。そのために、自然の一員としての生命体、動物である人間における自己性の問題をはじめ、知覚世界、意味の世界、社会の諸秩序などがどのようにして成立し、互いにどのような関係にあるのか、その順序に注意を払って考察している。伝統的哲学が育んできた諸概念や言葉から自由になって、日常の言葉で一つ一つの語にあらためて適切な内容を盛り込みながら叙述してゆくことを心がけている。食に関する文章が高校の教科書『国語総合』に掲載。

### 【単著】

- 『価値・意味・秩序——もう一つの哲学概論：哲学が考えるべきこと——』東信堂 2014年
- 『風の想い——奈津——』春風社 2013年
- 『哲学史を読むⅠ』東信堂 2008年
- 『哲学史を読むⅡ』東信堂 2008年
- 『音の経験——言葉はどのようにして可能となるのか』東信堂 2006年
- 『言葉の力』東信堂 2005年
- 『食を料理する—哲学的考察—』東信堂 2003年
- 『知覚する私・理解する私』勁草書房 1993年

### 【編著】

- 『言葉の歎び・哀しみ』東信堂 2011年
- 『哲学への誘いⅠ 哲学の立ち位置』東信堂 2010年
- 『哲学への誘いⅡ 哲学の振る舞い』東信堂 2010年
- 『哲学への誘いⅢ 社会の中の哲学』東信堂 2010年
- 『哲学への誘いⅣ 世界経験の枠組み』東信堂 2010年
- 『哲学への誘いⅤ 自己』東信堂 2010年
- 『言葉は社会を動かすか』東信堂 2010年
- 『言葉の働く場所』東信堂 2008年
- 『言葉の歴史』全12巻、別冊1巻 中央公論新社 2007～2008年 編集委員  
第6巻（19世紀英仏）責任編集 2007年 別冊「インタビュー」2008年（編集委員として、  
第62回毎日出版文化賞特別賞受賞）
- 『環境——文化と政策』東信堂 2008年
- 『環境——設計の思想』東信堂 2007年
- 『環境——安全という価値は…』東信堂 2005年
- 『フランス哲学・思想事典』弘文堂 1999年
- 『私というものの成立』勁草書房 1994年

### 【共著】

- 『哲学 はじめの一步』春風社 2015年
- 『文化としての二〇世紀』東京大学出版会 1997年
- 『死』岩波書店 1991年
- 『テキストブック西洋哲学史』有斐閣 1984年
- 『行為の構造』勁草書房 1983年

## 経験のエレメント——体の感覚と物象の知覚・質と空間規定——

2015年10月31日 初版第1刷発行

〔検印省略〕

\*定価はカバーに表示してあります

著者 © 松永澄夫 発行者 下田勝司

印刷・製本 中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

発 行 所  
株式 東 信 堂  
会 社

E-Mail tk203444@fsinet.or.jp URL: <http://www.toshindo-pub.com/>

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO.,LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

ISBN978-4-7989-1319-3 C3010 Copyright©2015 MATSUNAGA, Sumio